

## **41<sup>st</sup> International Annual IATEFL Conference and Exhibition**

**Aberdeen Exhibition and Conference Centre, Aberdeen, UK 18-22 April 2007**

### **大会参加報告**

笹島茂 (埼玉医科大学)

今年の大会は、スコットランドのアバーディーンで4月18日(水)から22日(日)までの5日間行われた。18日はPre-Conference Events (PCE)と Associates' Day が催された。前日の17日(火)には Associates' Dinner が開かれたが、私は日程の関係で出席できず、児島千珠代先生に参加していただいた。大会は、参加総数が1600人あまりとなる盛大なものであった。大会のプログラムのタイトルに Exhibition (展示) という語が入っている通り、各出版社や教材業者の展示にも大きなスペースを取っているのが印象に残った。

大会の概要は下記の通りである。

4月18日(水) Pre-Conference Events (PCE)、Associates' Day

4月19日(木) 第1日目 8:30~18:40

Plenary Session Guy Cook

4月20日(金) 第2日目 8:30~18:40

Plenary Session Agnes Enyedi

4月21日(土) 第3日目 8:30~18:40

Plenary Session Mike Sharwood Smith

4月22日(日) 第4日目 8:30~13:30

Plenary Session Maggie Farrar

この間に、様々な Talk, Workshop, Symposium があった。これらの内容は、British Council の協力により、Aberdeen Online としてウェブサイトで見ることができるようになっているので、興味のある方は参照していただきたい (<http://community.britishcouncil.org/iatefl/login/index.php>)。また、poster presentation では、今回 online でも公開するなど online 機能を相当に活用する方向性を示している点が特徴となっているようだが、実態は定かではない。興味ある方は IATEFL のウェブサイトアクセスして確認してほしい。ここでは、今大会中

に限られた範囲で関わった内容を報告することにする。

### **Associates' Day** について

9時から開催され5時まで熱心に様々な議題が話し合われた。各国の TA (Teachers' Association)が集まり、グループでまず自己紹介などが行われ、なごやかな雰囲気であった。会長の Tessa Woodward, Associates 担当の Sara Hannam の挨拶があり、この大会で新しく会長となる Marion Williams が紹介された。私のグループには、オランダ、韓国、カナダ、アルゼバイジャンの代表の人がいた。議題は下記の通りである。

10.00-10.30 The Articles' Bank - Using and Expanding the Resource

The Associates' Page in "Voices" - Sara Hannam

10.30-10.45 Introducing the TA Resource Book – Ana Falcao

10.45-11.30 Reaching More TA Members: How Can Technology Help? - Gavin Dudeney

11.30-11.45 Information available on Wider Membership Scheme - Glenda Smart

11.45-12.30 Accessing Funding for Teachers' Associations - Sara Hannam, Silvija Andernovics

1.15-1.45 Introduction to New Voices Editor and changes in "Voices" – Marion Williams, Alison Schwetlick

1.45-2.30 TAs and SIGs – Organizing Joint Events/Working Together - Sara Hannam, Sandie Mourao, Colin MacKenzie & other SIG Reps

2.30-3.15 Regional Cooperation/Utilising the Regional Speakers' List Silvija Andernovics, Sara Hannam

3.30-4.00 TAs and IATEFL - Increasing membership together - Adrian Tennant

4.00-4.45 Success Stories - Sara Hannam, Silvija Andernovics

4.45-5.00 Review of the Day - Action Plan for 2007-8 - Sara Hannam

主な話題は、IATEFL が様々な活動などの記事をウェブに掲載し、共有しようとする Articles' Bank を推進していること、学会運営の費用をどのように集めているか、Voices という雑誌の内容に関する提案、各 IATEFL との連携のあり方やスピーカーなどのリストの共有、メンバーの加入などについて議論があった。

さいごに、参加者からの成功例の報告などがあり、盛りだくさんの内容だった。

### 個人的に興味を持って参加した発表等について

まず、初日の Plenary Session の Guy Cook 氏が、‘Unmarked improvement: values, facts, and first languages’ というタイトルで、言語教育の発達を、4つの基準 (scientific, pedagogical, utilitarian, politic) から考察し、翻訳や第1言語の効用などについて論じた。昔からの議論の蒸し返しのような印象を受けたが、言語教育が果たす役割を再考する意味ではおもしろい提案だったように思う。初日から活況であり、その他にも多くの発表があったことは言うまでもないが、紙面の都合と個人の興味の限界からすべてを報告することは不可能である。以下は、教員研修と教員の認知に関連した内容に興味を持っていたので、その観点からいくつか印象に残った発表を報告したい。

Ester Nagy 氏の ‘Teacher cognition in vocabulary teaching: a case study’ の発表を聞いた。語彙指導に関して教員がどう考えているかを事例研究から考察した。語彙指導に関する理論と実践を背景として、辞書、文脈などをどのように扱うかについて教師のビリーフなどを調査した内容で、調査方法としておもしろいと思った。

Arthur McKeown 氏の ‘How teachers of other languages are doing their job’ という発表では、現在最も注目を浴びている ICT の活用が他の外国語教育で盛んであり、有効である点を強調した内容だった。特に、学ぶチャンスの少ない言語の学習に効果的である点を強調していた点が印象的だった。

Andy Kirkpatrick 氏の ‘Variation and intelligibility in World Englishes: implications for ELT’ では、様々な英語の実態が紹介され、英語教育はそれにどのように対処していく必要があるのかが論じられた。

Akiko Nambu 氏の ‘Teachers’ perceptions and team-teaching in upper secondary schools in Japan’ は、日本の英語教員がもっと海外などでの研修の機会を持つことの必要性をチーム・ティーチングの調査などから提言した。

Simon Borg 氏の ‘An international perspective on English language teachers’ conceptions of research’ は、様々な国で英語を教えている教員のリサーチに関する意識を調査した。教員がリサーチをすることの重要性を指摘する例は多いが、実際にどのような状況にあり、どのように考えているかを丹念に調査した内容で貴重な調査報告だった。

Martina Elicker 氏と Ulla Fuerstenberg 氏の ‘Observation and research in basic teacher training’は、授業観察を教員研修で効果的に実施しているという内容で、いまさらながら研究授業などの実践的な研修の効用を痛感した。

Erika Hepple 氏の ‘Challenging TEFL trainees’ professional beliefs: unexpected encounters in international practicum’は、香港の英語教員の研修内容として、オーストラリアの小学校で中国の文化を実際に教えてみるという異文化体験を盛り込んだ実践を報告した。

CLIL symposium では、ヨーロッパで CLIL(Content and Language Integrated Learning)がどのように実践されているかの事例が具体的に報告された。CEFR と関連しながら、CLIL が普及していることが予想された。来年の大会では、CLIL は最も注目されるのではないかと感じた。

また、Language Learner Psychology symposium では、学習者の心理研究の動向が報告された。このシンポジウムは次期会長である Marion Williams 氏がコーディネーターだった。定量的な調査では分かりにくい面があるので、益々学習者心理の研究は進行するのではないかと考えられた。Cizuyo Kojima 氏はこのシンポジウムで、日本人の英語学習者の成功者の事例を報告していた。日本人が英国に来てどのような心理で英語学習に対処しているかを具体的に報告していて興味深かった。

大会のさいごの plenary session では、Maggie Farrar 氏が ‘Dealers in hope’ というタイトルで熱のこもった話をした。教育における学校のリーダーシップの意味とその必要性を論じた内容で、イングランドの教育の現状と今後の動向に対する志向を多少理解できた。

### 笹島個人の発表について

私は、poster session で参加した。魅力の一つは、大会後半年にわたって IATEFL の HP に掲載してくれるという点である。また、内容が日本の英語教師調査に関するもので興味のある人しか聞いてくれないと思ったからだ。発表タイトルは、 ‘EFL Teachers’ Awareness of ESP in Teacher Education in Japan’である。掲示の場所は、業者展示と同じ場所で、コーヒーなどの飲める比較的よい場所だった。気軽に興味ある人と話ができて、いままでと違い大会の目玉とすると勧められたのだが、結局、多くの大会と同様であった。しかし、結果的に、個人的にはかなり多くの人とコミュニケーションをかわすことができたことはとてもうれしか

った。口頭発表だと運が悪いと聞いてくれる人も少なく、がっかりすることも多いからだ。その点、意外に興味を持っていただき、よい情報交換ができた。発表の趣旨は、日本の中学校英語教員の ESP 等に関する意識を教員研修の観点から調査したものである。結論として、ESP 等の意識は薄く、ヨーロッパ等で実践されている実践的な外国語教育及び教員研修の内容がもっと日本の教員研修に導入されるべきという提言をしている。

## 大会全般に関すること

IATEFL の大会は以前から参加したいと思っていた。予想通り興味深い内容が多く、実践的な指導や教員研修などに興味を持つものとしては満足のゆく結果だった。最も貴重だった点は、参加者との交流である。英語教育あるいは実践的な言語教育に携わる人ばかりだったので、だれとでも話が弾んだ。英語を母語とする人、英語を母語としない人など、それぞれがそれぞれの立場で英語教育の現状を、指導のあり方、教材のあり方、研修のあり方など、実り多い交流ができた。発表の中には、自分のビリーフだけを話している人もあったし、理念的なことを話題とするよく分からないワークショップもあったが、総じておもしろかった。特に目立った内容は、やはり、ICT など科学技術の発達とその活用だろう。ほとんど日本の英語教育の事情とちがいはないが、一つ日本の事情と大きく異なる点は電子辞書関連だろう。辞書に対する関心はコーパスの発展にともない高いはずだが、売り出していたのは書籍の辞典だった。これは不思議なことだった。

大会を通じて最も考えさせられたことは、「お金」のことだ。Associates' Day でも一つの大きなトピックだった。人を集めるのも、大会会場を借りるのも、よりよい研究を進めるのも、有益な情報交換をするのも、すべての根本に「お金」の問題がある。会員の会費だけでよい大会を開催することはむずかしい時代になった。その点、本大会の後ろ盾となる公的な機関や企業の力が、そこに携わる人の力を支えていると実感した。大会のさいごで講演した Maggie Farrar 氏が熱く語っていた 'leadership' という言葉が妙に心に残っている。教育におけるリーダーシップはいつのときもキーワードだが、それを支えるシステムがないかぎり効果は期待できない。

閉会后、会場に近くにある Thomas Glover House に立ち寄った。明治維新で多くの志士の援助に貢献し、三菱の創始者の一人でもあり、あの麒麟ビールのマ

ークを考案し、長崎のグラバー邸で有名な「スコットランドのさむらい(Scottish Samurai)」の Thomas Glover が暮らした家である。その日の訪問者は私一人だったが、丁寧に説明してくれた。伊藤博文、森有礼、井上馨などがその家を訪れ、宿泊している。彼らのような明治のリーダーを育てるにも、それなりの後援者とお金が必要だったのだろう。当時、こんな田舎（と言っては失礼だが）のスコットランドのアバーディーンで彼らは何を見て何を話したのだろうかと考えながら、アバーディーンを後にした。

さいごに、来年の大会の案内をしておく、来年は、イングランドのエクセターで開催される。日本から参加するには時期的によくはない頃であるが、多くの方が参加されることを期待したい。また、IATEFL の会員となって、様々な英語教員と交流することはある意味で有意義であると思うので、IATEFL の HP にアクセスして情報を得ることをお薦めしたい(IATEFL HP: <http://www.iatefl.org>)。

以上